様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：２０１０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７３０４６４

研究課題名（和文）高齢者福祉に対する子どもの感性を育む地域コミュニティ：幼老複合施設の新しい試み

研究課題名（英文）The possibilities and the management of a complex-facility for children and elderly people as a hub for intergenerational exchange

研究代表者
片山　めぐみ（Katayama, Megumi）

札幌市立大学・デザイン学部・講師

研究者番号：４０４３３１３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,100,000円、（間接経費）　330,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幼老複合施設のなかでも学童保育施設と居住系老人福祉施設の組み合わせを研究対象とし、子どもと高齢者の自然発生交流を実現している先進事例について一般化可能な運営手法を導き出すことを試みた。国内の事例調査では、施設の複合は建物の形式にとどまっていることが多いことが分かったが、なかには子どもの交流対象を高齢者のみならず介護職員、住民ボランティアにまで拡大し、世代間交流および介護・福祉環境の体験、地域コミュニティーへの参画を意識して運営している取り組みも見られ、この先進事例について観察・ヒアリング調査を行い、ハード面およびソフト面から具体的な運営手法を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In they study we conducted a field survey on intergenerational communication at a building complex that contains a children's hall and a nursing home, and the results revealed both soft and hard ways of effectively managing such facilities as an advanced case study. It became clear that essential elements having enough common space for them to do their own activities, a watching system over the aged and children's activities by staff, and proper arrangement of personnel are important condition. We had a discussion about the community, which has made its children become aware of the importance of taking care of the community encourages them to communicate elderly people by having them communicate not only with elderly but also with care-giving staff, and volunteer staff from the community.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：高齢者　子ども　幼老複合施設　地域福祉　特別養護老人ホーム　児童館　コミュニティ　世代間交流

１．研究開始当初の背景

現代の少子高齢・核家族社会において、子ども達は祖父母との別居により高齢者との交流だけでなく、間近で高齢者介護を目にする機会を失いつつある。一方、高齢者は、孫の育児や保育から生き甲斐を見いだしたり、子どもの成長を感じながら自らの人生を振り返る機会を失いつつある。地域社会においても世代間コミュニケーションが確実に減少している。世代間交流の効果の研究は、高齢者からの視点が多く、自尊意識を高め、生きがいを与える効果をはじめ、認知症高齢者の表情が豊かになったり発語も多くなるといった、認知症の進行緩和効果も報告されている。近年、こういった問題と可能性を背景として、幼老統合ケアの実現を目指し、老人福祉施設と保育園などを合築する幼老複合施設の開設が試みられている。施設の組み合わせは様々であり試みは少なくないが、開設のねらいとは逆に、興味も活動量も異なる子どもと高齢者を共在させることは難しいといった現場の声も少なくない。現状では、具体的な危険や運営の問題点、および現場における成功例が共有されていないため、新規の取り組みに結びつかないという問題がある。

２．研究の目的

本研究では、相手の状況を理解した上でのコミュニケーションがある程度可能な年齢に達している小学生に注目し、学童保育施設と居住系老人福祉施設の複合を研究対象とする。子どもと高齢者の自然発生交流を実現している先進事例について、ハード面およびソフト面から一般化可能な運営手法を導きだす。子どもの交流対象を高齢者だけでなく介護職員、住民ボランティアにまで拡大し、世代間交流や介護・福祉環境の体験、地域コミュニティーへの参加状況について扱い、高齢者福祉に対する子どもの感性を育むコミュニティについて具体的に考察する（図１）。

３．研究の方法

児童館と居住系老人福祉施設の合築事例を収集し、交流を促進するためのハード・ソフト面の取り組み、運営の問題点を探る（調査１）。次に、収集事例から調査対象を選定する。ハード面については、間取りおよび家具配置を調査し、ソフト面については、両者の交流を促進するための企画や組織体勢について施設運営者にヒアリングする。ハードとソフトの仕掛けから、実際に利用者のどういった行動が見られるのか観察調査を行う（調査２）。最後に、こういった環境で育った子どもの福祉ケアに対する意識や福祉活動の従事状況について卒業生にヒアリングを行う（調査３）。

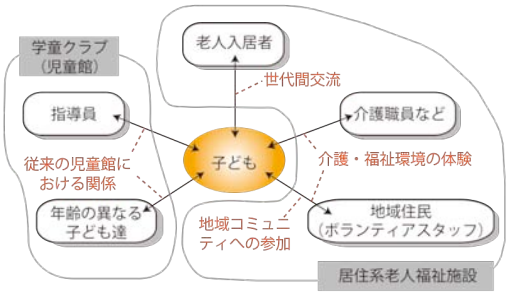


図１　高齢者福祉の場で子どもが得られる体験と学びの仮説

４．研究成果

(1) 複合化と運営方法の動向調査（調査１）

インターネット検索により８施設が見いだされた。各施設に対して子どもと高齢者が自由に行き来できる共有スペースの有無およびその利用実態について電話でのヒアリングを行い、共有スペースを有する施設については視察を行って使用状況を調査した。

８施設のうち２施設は、デイサービスと児童館が１階、特別養護老人ホームが上階に位置し、玄関は共有しているが、共有スペースがなく、日常的に行き来していない状況にあった。この他に、建物は連続しているが玄関が分かれていて内部で行き来できないものや、学童保育のスペースをボランティアの活動空間や高齢者との交流場所に使用していたり、交流空間として畑やかまどのある中庭を有し、両者が自由に行き来することができるものもあった。日常的に自由な行き来を許容していない施設へのヒアリングでは、その理由として以下の点があげられた。一つめに、高齢者と子どもの互いの施設訪問は職員がつかなければならないので自由な行き来は無理であるといったスタッフ配置の問題。二つめに、認知症の高齢者とは積極的な交流は望めないので、デイサービスの高齢者のなかで将棋の得意な方などと交流させている。子どもが高齢者に遊戯や劇を披露するという交流をしてきたが、子ども達の意欲が低下し、デイサービス利用者との将棋やオセロ、囲碁を一緒にするという方法に変えた。同じ場所で子どもに遊ばれては危険が伴うので、自由に行き来する運用は想像できない。これらは、対象に合わせた適切な交流企画の問題である。三つめに、高齢者施設と児童館を行政から委託された異なる法人が運営しているため連携が難しいといった組織の問題である。異なる部所の連携や人手不足の問題は同一組織内でも一定のハードルがあると考えられるが、この問題に対しては、⑤の施設において、子どもと高齢者との交流、および地域ボランティアのオーガナイズを行う担当者を配備している。玄関脇に常駐することで認知症の入所者の出入りに気を配る役割も担っている。さらに、地域住民ボランティアの

登録人数が 50 人を越え、日常的に共有スペースで活動しているほか、屋上での畑づくり等のイベント企画を行っている。

以上の分析から、居住系老人福祉施設と児童館もしくは学童保育施設との複合は、建物の形式にとどまっていることが多く、自由に互いを訪ねることが許されている施設は少ない。本研究では、ハードおよびソフトの取り組みいずれも最も対応策が進んでいる社会福祉法人健光園の施設を調査対象とし、なぜこのような運営が可能なのか観察とヒアリング調査から明らかにすることとした。

(2) 社会福祉法人健光園の取組み（調査２）

社会福祉法人健光園による「高齢者福祉総合施設ももやま」と「ももやま児童館」は、１階にはデイサービスセンターと児童館、玄関、「よりみち」と称される共有スペース、多目的スペースがある（図２）。２～３階には特別養護老人ホームがあり、感染症などの危険がなければ子ども達は自由に建物内を行き来できる。そして、様々な主体の共生を目指す法人のコンセプトとして「昭和の路地裏作戦」というものがある。その名の通り、昔ながらの住宅地の路地裏で繰り広げられたような、多世代の生活シーンの創出空間としてこの共有スペースを位置付けるとともに、地域住民も巻き込みながら、地域ケアコミュニティの場を形成しようとしている。中央の長い廊下を路地、「よりみち」を空き地のように見立て、すべての来館者は共通玄関から入ってこの廊下を通ること、そして玄関周辺にいるスタッフやボランティアから必ず声をかけられるしくみになっている。廊下の端には、歩行補助器具や車椅子（写真６）、ソファ（写真１）などが並べられており、高齢者が運動のために廊下を歩いたり休憩できるようになっている。この施設は、児童館とデイサービスおよび特別養護老人ホームとの距離が十分保たれており、活動量の多い子供が頻繁に虚弱高齢者へ接触することによる悪影響を抑えつつ共有スペースにて選択的に交流をはかれることが特徴である。

施設全体における子どもと高齢者の計画交流の内容は以下である。特別養護老人ホームでは、一緒におやつを食べたり、かるたやゲームをしたり、TV を見たり、宿題をすることが毎日の日課となっている。入所者のなかには簡単な算数や書き取りを教えることを楽しみにしている方がいる。学童の子ども達はデイサービス利用者にただいまの挨拶をすることが日課である。

スタッフによると、子どもと高齢者が日常の暮らしの中で居合わせることが最も重要なことであり、会話や共同作業をする状況だけが交流とは考えていないとのことであった。こういった、ゆるやかな交流を発生させるには、交流プログラムと組織同士の連携に長年積み重ねてきたノウハウがある。組織同士の連携については、以下の４点が挙げられる。１点目に、活動プログラムはデイサービスおよび児童館、「よりみち」でそれぞれ企画されており同時に開催されている。子どもも高齢者も、いずれに参加するか選ぶことができる。２点目に、高齢者を自由に行き来させても「よりみち」にスタッフがいるため施設外に出ても気付いてもらえるという安心感がある。３点目に、年間計画はすべて埋めず、突発的なイベントを実行できるようにしている。ボランティアが子どものために企画するものなど、すぐに実現できる余地のあることが場の活性につながる。４点目に、児童館の行事をなるべく「よりみち」で行うようにしている。乳幼児のお店屋さんごっこなどをやっていると、高齢者がじっと観察していて、やがて参加してくることがある。

以上のほかにゆるやかな交流を発生させる仕掛けとして、共有スペースと廊下、玄関周辺の環境づくりに重視している。スタッフスペースのパーティションを低くしてスタッフが空間全体を視認できるようにしたり、金魚鉢や作品展示など廊下に立ち止まる要素を設置した。また、TV 周辺に畳やソファを設置することで、目的なく休憩したりごろごろしながら会話をしたり、活動目的に合わせてスペースを変更できるようにした。複数ある玄関も中央玄関に利用を統一している。

昭和の路地裏作戦が展開される「よりみち」および中央廊下を観察対象空間とした。利用者の活動内容と物理的環境の関係を把握するために、調査員２名が共有スペースで対象者の行動を観察し、５分おきに行動の種類と滞在場所を平面図に記録した。調査期間は、平成 24 年 3 月 21 日～23 日、平成 25 年 3 月 22 日～24 日、いずれも 10:00～17:00 に行い、計 42 時間分のデータを取得した。

昭和の路地裏にはどのような行動が展開されているのだろうか。子どもと高齢者、スタッフの行動の種類とその割合を算出した結果は以下である。子どもの行動の多い順に、ソファ・畳でごろごろする（14%）、移動（13%）、将棋（13%）（写真７）、かくれんぼ（12%）、オセロ（12%）、TV 視聴（11%）、剣玉（10%）（写真８）、折り紙（9%）、一輪車（7%）（写真９）となっている。ごろごろする・移動する・TV 視聴のほかは、昔ながらの遊びであり、高齢者にとって自分にもなじみのある情景が繰り広げられていることになる。また、TV 視聴も調査期間中は高校野球中継があったため、子どもと高齢者に共通の話題を与えていた。児童館指導員や高齢者から指導を受けたり叱られている子どもを見ることもある（写真 10）。高齢者の行動については、散歩

**図２** 「高齢者福祉総合施設ももやま」と「ももやま児童館」の１階平面図と共有スペースの様子

（単なる移動を含む）21%、休憩 13%となっている。スタッフの行動では、ミーティングや打合せ、スタッフ・高齢者との会話、保育ボランティア、イベント準備で滞在している。

調査対象空間における滞在割合は、子どもが 66%、高齢者が 73%、スタッフおよびボランティアスタッフが 72%であった。自然発生交流に注目すると、子どもが高齢者もしくはボランティアスタッフと何らかの関わりをもった行動は調査時間中の 45.2%、場面としては 22 シーンを数えた。

関わりが発生した詳しい状況を表１に整理する。高齢者から関わりのきっかけをつくったのは 13 シーン、子どもからきっかけをつくったのは９シーンだったほか、高齢者イベントに子どもが参加した２シーンがあった。全体として、「Ⅰ.子どもの遊びの仕掛けがあり、その姿が見える」および「Ⅱ.動的遊びを許容するスペースがある」といった空間のつくりと、「Ⅲ.運動や休憩、食事などの高齢者の滞在目的がある」ことによって多くの自然交流シーンが発生していることがわかる。なかでも、剣玉やこま回し、一輪車などは、昔の路地裏で見られた遊びであるが、他施設から見れば事故が発生しかねない危険な行動に映るだろう。当該児童館は体育館をもたないが、なぜサロンスペースに思い切って動的遊びを許容できるのかという点については、「Ⅳ.ボランティアスタッフなどの作業場でもある」ことや「Ⅴ.安全性を監督し安心を与えるスタッフの配置」によって、常に大人の目があることが運営の工夫として挙げられる（シーン９、19、22、23）。昭和の路地裏に隣接するカフェには常時、地域の高齢者ボランティアが滞在し、カフェのサービスを提供するほか、路地裏全体の監督を担っている。また、常駐するスタッフが、高齢者と子どもの信頼できる話し相手となって、時に両者の交流を媒介する役割を担う（シーン 14）。さらには、「Ⅵ.顔見知りの関係を醸成するプログラムがある」ことで、××さんに会いに行こうといった、交流自体が目的の上位レベルのコミュニケーションが促される（シーン１、５）。最後に、この施設に特徴的なのが、子どもに参加を強制するようなイベントがないことである。高齢者イベントへの参加は自由であり、映画会は見飽きた子どもが席を立っていたが、コンサートでは高齢者に混じって積極的に参加していたり、折り紙をしながら一緒に歌ったり踊ったりしていることが面白い（シーン 12、13）。これは「Ⅶ.子どもと高齢者に共通の興味をひくイベントが開催される」にあたる。

写真７ 将棋　写真８ 剣玉　写真９ 一輪車　写真10 指導員に叱られる様子

両者の自然発生交流を促進するための要素は分かったが、次にどういった空間構成および家具配置に配慮するべきか。図３は、各シーンがどのような物理的状況で発生したのかを人の位置と行動軌跡をプロットした上で、表１の自然発生交流を促進する要素を加えて図にしたものである。中央廊下は高齢者が自分のペースで運動や休憩をしながら子どもの姿に目をやり、気が向けば声をかけたり近付いていくという一連の行動を促す（シーン７、23、９、22、18）。一方で、高齢者の休憩場所が子ども達の活動から一定の距離を保っていると考えられる。そして、中央廊下に隣接してスタッフルームやカフェがあることで、見守り・監督が保たれているとともに、子どもとボランティアスタッフ、およびスタッフを介した高齢者との交流が促進されている（シーン 21、17、14）。また、可動式家具によって空間のしつらえを変え

表１　子どもと高齢者の自然発生交流を促進する要因

| | シーン番号 | 自然交流の内容 | Ⅰ 子どもの遊びの仕掛けがある・姿が見える | Ⅱ 動的遊びを許容する広いスペースがある | Ⅲ 高齢者の運動・休憩・食事の場所がある | Ⅳ ボランティアスタッフなどの作業場でもある | Ⅴ 安全性を監督し安心を与えるスタッフの配置 | Ⅵ 顔見知りの関係を醸成する計画交流プログラムがある | Ⅶ 子どもと高齢者に共通の興味をひくイベントが開催される |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 高齢者から子どもへのはたらきかけ | 4 | 廊下を散歩中の高齢者がギターをひく子どもを褒める | ○ | | ○ | | | | |
| | 5 | 子ども達に書道を教えている高齢者が卒業の祝辞を伝えに児童館を訪れる | | | | | | ○ | |
| | 6 | 保育ボランティアで来館した高齢者が折り紙を教える | | | | ○ | | | |
| | 7 | 廊下で休憩中の高齢者がピアノを弾く子どもをしばらく見ていた後、近付いて一緒に弾く | ○ | | ○ | | | | |
| | 8 | 廊下で遊ぶ子どもに休憩中のおばあちゃんが声をかける | ○ | | ○ | | | | |
| | 9 | バスを待つデイサービスの高齢者がこま回しをする子ども達を見ていて話しかける | ○ | ○ | ○ | | | | |
| | 16 | 高校野球を観戦中の子ども達の和に高齢者が加わって、会話しながら一緒に観戦 | | | ○ | | | | |
| | 17 | 子ども達とカフェマスターが高校野球を観戦。高齢者が何度もTVの方へ歩み寄って会話する | | | ○ | ○ | | | |
| | 19 | 子どもが一輪車で転んで高齢者に声をかけられる | ○ | ○ | ○ | | | | |
| | 20 | 散歩中の高齢者が子ども達をじっと見ていて話しかける | ○ | | ○ | | | | |
| | 21 | カフェマスターに話しかけられながら、子ども達が一輪車でカフェカウンターとテーブルを行き来する | | ○ | | ○ | | | |
| | 22 | 一輪車を乗る子ども達に話かけてきた車椅子の高齢者の周囲を子ども達がぐるぐる回る | ○ | ○ | ○ | | ○ | | |
| | 23 | 剣玉で遊ぶ子ども達を見ていた高齢者が自分も剣玉を披露 | ○ | ○ | | | | | |
| 子どもから高齢者へのはたらきかけ | 1 | 上階の特別養護老人ホームに子ども2人が手押し車を押しながら遊びに行く | | ○ | | | ○ | ○ | |
| | 2 | 昼食中の高齢者に子どもが話しかける | | | ○ | | | | |
| | 3 | 高校生と高齢者との将棋の対戦を子ども達が眺めながら会話する | ○ | | | | | | |
| | 10 | デイサービスの高齢者に「ただいま」の挨拶をしにいく | | | | | | | |
| | 11 | 散歩中の高齢者に子どもが話しかける | | | ○ | | | | |
| | 14 | 子ども達が高齢者とスタッフの会話に入って一緒におしゃべりを始める | | | | | ○ | | |
| | 15 | ボランティアスタッフの生け花を子ども達が手伝う | | | | ○ | | | |
| | 18 | 子ども達のオセロにおばあちゃんが加わる | | | | | | | |
| | 24 | コーヒーを飲んでいた高齢者達に子どもが話しかける | | | ○ | | | | |
| 高齢者イベントへの | 12 | 高齢者に混じって子ども2人がコンサートに参加。ほかの子どもは折り紙をしながら一緒に歌ったり体を動かしたりしている | | | | | | | ○ |
| | 13 | 高齢者のコンサートを眺めながら、将棋やオセロをしたり、まんがを読んで一緒に歌う | | | | | | | ○ |

写真　主な自然発生交流のシーン

られることで様々な活動を取り込んでいる。テーブルセットを片付けてつくられたコンサート会場の傍らで子ども達が折り紙遊びができることが、興味の異なる主体に個別の行動を許容しながらも互いの行動に関わるきっかけを提供している（シーン 12）。

(3) 世代間交流の効果（調査３）

児童館を以前利用していた中学生と高校生の計６名（男子３名、女子３名）を対象とし、主に以下の２点についてヒアリングした。①児童館での高齢者との交流で印象に残っていること、②現在関係している福祉活動および将来の福祉系進路の選択。また、児童館スタッフには①についてヒアリングした。調査日は、平成 25 年 3 月 22 日である。

高齢者との交流で記憶に残っていることとして、「剣玉やこま、将棋をさして遊んでもらったが楽しかった」、「すごく上手だった」といった遊びの記憶のほか、「(認知症の)高齢者との話し方が分かった。友達同士や他の大人とも違うけど、話し方を工夫するときちんと理解してもらえた」、「高齢者にうるさいと叱られ、友人が泣いて帰ってくることもあった」といった世代差や認知症の人との関わりについてあげている。また、「救急車が来て運ばれていく高齢者を見た」、「ご遺体を見たときに静かに手を合わせることを教えてもらった」という経験談からは、人の死に接する際の気遣いを養うきっかけとなっていることが分かる。２名の高校生はいずれも、保育園職員になるために大学では幼児教育や児童福祉を学ぶことを予定し、他の児童館へも日常的に子どもの面倒をみに通っている。また、児童館および交流スタッフへのヒアリングからは、子どもに対して大人がナイーブになりすぎない状況が確認できた。特別養護老人ホームで宿題をしたり遊んだりしているうちに、子ども達は、認知症の高齢者

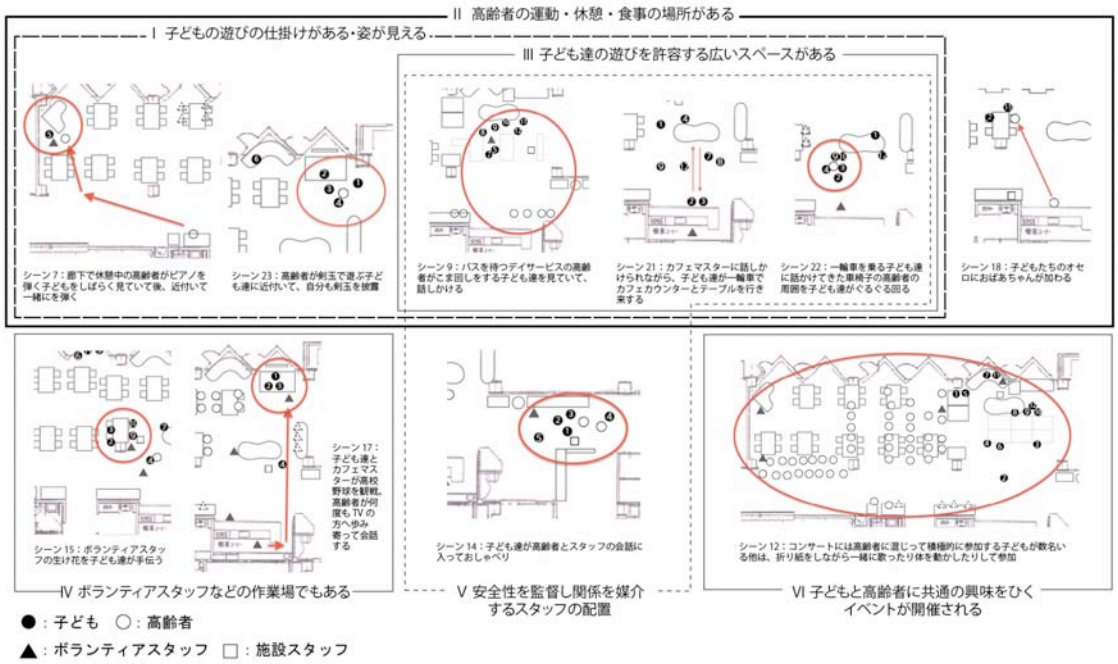


図３　主な自然交流シーン発生の物理的状況

の行動特性が理解できるようになる。不自由さや認知症という現実を、理屈抜きで受け止めてもらう環境になっており、子ども達の福祉的センスを養う場があると感じるとのことであった。子育て支援参加者が連れて来ていた乳幼児が成長してボランティアに参加してくることもある。また、赤ちゃんとのふれ合い事業高校生の参加者が、いまは児童館指導員として働いている。10 年経過し成果を感じるようになってきたとのことである。

(4)考察

世代間交流：子どもは日常的に高齢者と接することで、叱られたり褒められたり、昔の遊びを覚えたり、高齢者に対する接し方を学んだりといった体験をしていた。介護・福祉環境の体験：職員やボランティアによる介護を目にしたり手伝える場となっており、認知症の高齢者の言動や老い、死を知る機会になっている。地域福祉コミュニティへの参加：ボランティアスタッフを手伝ったりイベントに参加したりなど、ケアコミュニティ環境のなかで遊ぶ状況が見られた。以上の分析より、子どもと高齢者の関わり方には交流の幅があることが分かる。ひとつの空間に居る、顔を合わせる、挨拶する、会話する、共に参加する、遊ぶ、会いに行くなどコミュニケーションのレベルは様々である。上位の関わりを生むためには、弱い関わりを重ねて親密さを醸成させることが必要である。ひとつの空間に居る、顔を合わせるといった弱い関わりはそれ自体が主体にとって行動目的でないため、そういった行動が促される仕掛けが必要である。ハード面では、玄関を一つにする、居間のような共有スペースを備える、移動動線と隣接させる、互いの存在を視認できる空間づくりや家具配置が仕掛けとなる。ソフトなって両者の興味が重なるコトやモノを仕ける必要がある。最後に複合の組み合わせについて検討する。デイサービス施設は、利用者である老人が毎日入れ替わるため交流頻度が低く、時間も短い。また、保育園は、子ども達が短期間で卒園してしまうことや、年齢的に福祉を体験したり学んだりするには理解度や交流の幅において限界がある。居住系老人福祉施設と学童クラブ（児童館）の組み合わせについては、個人と個人の長期的・固定的な関係醸成が期待できると考える。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計１件）

片山めぐみ他、高齢者福祉に対する子どもの感性を育む地域コミュニティ―幼老複合施設における世代間交流の試み―、日本世代間交流学会第４回全国大会､2013 年 10 月５日、東京都健康長寿医療センター研究所

〔図書〕（計２件）

片山めぐみ他、株式会社ワールドプランニング、積雪寒冷地における高齢者の居場所づくり―高齢者のための地域コミュニティ、pp. 271-289、2014

片山めぐみ他、三学出版、『世代間交流の理論と実践』シリーズⅠ―高齢者福祉施設での世代間交流を生み出すハードとソフトのデザイン―、pp. 70-83、2014

５．研究組織

(1)研究代表者

片山　めぐみ（KATAYAMA Megumi）
札幌市立大学デザイン学部・講師
研究者番号：４０４３３１３０